

学校経営のポイント

オリンピックの“光”と“闇”

若井 彌一

ソルトレークシティ（アメリカ・ユタ州）で開催されている冬のオリンピックに関する報道がにぎやかである。ふだんは、スキー、スケート、スノーボード（以下、スノボと略）などに親しんでいない人々も、ニュースや報道特集で報じられているこれらの世界的水準の高さをブラウン管を通して感動をもって楽しんでいることであろう。

“肝移植”で復活したスノボ銅メダリスト

私事に及んで恐縮であるが、筆者は小学校4年から回転（スキー）とダウンヒル（滑降）の地区競技大会に出場しはじめ、中学2年のときによく回転競技で優勝した経験をもつ。3歳のころから、冬はスキー漬けのような生活であったことを回想する昨今となった。

こんな「自分史」を背景にしているので、いまでもスキーのアルペン種目には異常なほどの関心を持ち続けている。それに比較すると、スノボに対する関心はそれほど強くはなかったが、パラレル大回転は見応えがある。

この種目に関して、ちょっとした感動的な記事に接した。2月15日（日本時間16日）、スノボの男子パラレル大回転で、29歳のクリストファー・クルーグ（アメリカ）という青年が、余命2ヵ月という死に直面する状態から肝臓移植手術により命拾いをし、その後の懸命の努力によってオリンピック出場を果たし、見事銅メダルに輝いたというものである（2月17日付『毎日新聞』）。

「原発性硬化性胆管炎」という病気は、原因不明で、診断・治療ともに難しく、クルーグの場合、肝臓移植の方法しか残されていなかったといわれる。クルーグの記憶では、リストに名前のあった16人が移植を受けられずにこの世を去ったという。

ドナー（donor：臓器提供者）は、銃で撃たれて死亡した10代の少年であったというのが、いかにも“銃社会”アメリカらしいという気もする。それはともかく、死にゆく人の臓器の提供で命拾いした青年が、その後の厳しい練習に耐えて、見事オリンピックでメダリストになるというのは、生命のリリースという点でも、困難に負けずに努力し、挑戦するという点でも、感動を、また、生きる勇気を与えてくれる。

フィギュアスケートでは“不正判定”発覚

感動や楽しさの一面だけでなく、今回もまたオリンピックの“闇”の部分が露呈した。フィギュアスケートの判定で、フランス人審判（女性・40歳）がフランス連盟会長による判定の圧力を受けたというものである。

結論的には、1つの種目に2つの金メダルを出すという苦肉の策を講じたのだが、この問題は今後、フィギュアスケートだけでなく、「判定」方式の種目の他の種目にも広まる可能性もあるという。

オリンピックメダルの重さゆえに生じる“闇”の部分であるが、仕方なしでは済まされない。教育問題としてぜひお考えいただきたい。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授）

キーワードは“教師”と“子ども”！
“読本シリーズ”最新刊 好評発売中

- 『発展的学習の指導の手引き』高階玲治編・2100円
- 『子どもの学力読本』新井郁男編・2100円
- 『指導力不足教員』読本』八尾坂修編・2100円
- 『心を育てる「朝の読書」』林公編著・2100円

本紙はホームページでも閲覧できます
<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>

予約受付中！ 10年間の審議会重要答申・統計資料・新法令・通知通達等を整理収録！ 教育開発研究所・刊

創刊30周年記念増刊『教職研修‘02情報版』菱村幸彦監修

各学校・教委に1冊常備の資料大全 【資料CD ROM】添付 4月増刊・B5判300頁・定価2,730円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）